



巡回指導中、アデラ看護師長にアドバイスをする石島専門家

「きれいな病院」をアフリカに！

医薬品やカルテの整理・整頓など「5S」の推進によって、病院スタッフが働きやすい環境づくりに努め、さらに「カイゼン」によって効率的な診療活動や患者が安心できる医療体制を実現したスリランカの病院。その経験が今、遠くサハラ以南アフリカにも伝わり、各国で「きれいな病院」を広げる取り組みが始まっている。

スリランカの取り組みから学ぶ

薬が種類ごとに整然と並べられた薬品棚。床に張られたテープに沿って、決められた位置にきちんと配置された車いす。「何がどこにあるかすぐに分かり、とても働きやすくなりました」

タンザニア最大の都市・ダル

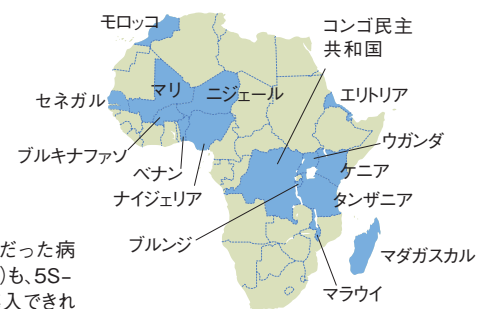
エスサラームから車で南に約12時間、ムベヤ病院の看護師が笑顔で話す。以前は、使用済みの医療器具や薬品が所構わず放置されていたというこの病院。業務効率も悪く、一日待っても診察を受けられない患者も多かった。そんなムベヤ病院を大きく生まれ変わ

らせたのが、日本の製造現場から生まれた「5S」と「カイゼン」。「今では待たされる時間も短くなり、医師や看護師の対応も良くなった。そして何より、清潔な病院は安心」と患者からも喜ばれている。

アフリカのすべての病院に5S-カイゼンを。そんな願いと

もに、JICAが2007年からサハラ以南アフリカの国々で実施しているのが「きれいな病院プログラム」。保健・医療機材が極端に不足しているこの地域に対して、保健・医療を担当する行政官、医師や看護師といった医療従事者に対する研修やセミナー、JICA専門家と保健省担当官による巡回指導などを行い、5S-カイゼンを活用した医療サービスの質の向上を後押ししている。これまでに、日本の病院や大学の教授陣などの協力の下で、タンザニアをはじめアフリカ15カ国で展開されており、各国で一つずつモデル病院を選び、そこを拠点に国内への普及が進められている。

きれいな病院プログラム実施国



以前は乱雑だった病院内の棚(上)も、5S-カイゼンの導入できれいに整理され(下)、業務効率の向上につながった



研修や巡回指導などで学んだことを生かし、現在はそれぞれの国で5S-カイゼンの推進をリードしている行政官や医療従事者たち。そんな彼らの脳裏に焼き付いているのが、07年3月に視察したスリランカの病院での光景だ。訪れたのは、日本の5S-カイゼンを独自に取り入れ、医療サービスの質を劇的に向上させた、コロンボのキャッスルストリート病院。使われていなかった倉庫を整理して病床を増やしたほか、カルテの取り扱い方を工夫したり、リネンや医療器具の使用前後の分別、衛生管理の徹底、休憩室の設置によるスタッフの労働環境改善に取り組んだ同病院の経験は、スリランカ全土150カ所以上の病院にも広がっているという。母国でも導入できそうな「簡単な」実践例を数多く目にし

たアフリカの研修員たちは、大きな衝撃を受けた。

変化を生み出すのは一人一人の意識改革

「何か気になる点はありませんか？」

「入院患者の回診に使う薬剤が、時々補充されていないようです。毎回、回診後に確認できる仕組みをつくってみては？」

タンザニアのモデル病院であるムベヤ病院の一室で、医師や看護師たちが何やら真剣な表情で話し合っていた。彼らは、各部門の代表者で構成される「業務改善チーム」のメンバー。5Sによる職場環境の改善、そして5Sを踏まえた診療活動や医療体制などのカイゼンを図るため、職員から募った意見やアイデアを参考に改善策を定期的に協議

している。「この活動がスタートしてから、『自分たちの意見が必要されている』と職員が実感するようになり、仕事への姿勢も前向きになりました」と看護師長のアデラ・ムブラさん。これまでに、病棟の整理整頓の達成状況が一目で分かるボードを作成するなど、一人一人の問題意識の高まりが形となってさまざまな効果を生んでいる。

そんなムベヤ病院の取り組みは、国内各地の病院にも着実に広がっている。その数は全国37カ所。巡回指導などで精力的に各病院を飛び回る石島久裕・JICA専門家も、「金銭的な余裕がなくても、多くの病院ができることから始めようと努力している。その様子を見るのは、自分にとっても大きなやりがいとなっています」と話す。

一方、青年海外協力隊(保健分野)の多くも、各国の医療施設で5S-カイゼンの普及に努めている。ウガンダのモデル病院・トロロ病院では、協力隊員で保健師の小林絵梨さんが、5S-カイゼンに対する理解を深めようと、さまざまな活動を展開。整理整頓の推進や、病院内の5S-カイゼンに関するトレーニングや

ニューズレターの発行などを行っている。

「以前は問題だと認識していながら何の手も打とうとしなかった記録の不備も、最近自分たちで指摘し合うようになるなど、職員の意識も変わってきているようです」と小林さん。視察に訪れる他の病院関係者の良き手本となるよう、「ゆっくりでもいいので着実に」病院内のカイゼンを進めていくつもりだ。

「5S-カイゼンはマネジメントの手法としてはとてもシンプルです。長年、プログラムの立ち上げに尽力してきた北海道医療大学の半田祐二郎教授はそう話す。「でも、シンプルな活動が、医療の質を大きく向上させることにつながる。それが、アフリカでも受け入れられた理由でしょう」。

製造現場で生まれた5S-カイゼンは今、保健・医療の世界にも変革を起し始めている。



各部署には、5S-カイゼンの進捗状況を示す掲示板が設けられるようになった



ウガンダのトロロ病院で、病院全体の問題点を踏まえ、5S-カイゼンの促進のためのミーティングに参加する青年海外協力隊の小林さん(右から2人目)